



NHKの連続テレビ小説「らんまん」の影響で、高知県では地元出身の牧野富太郎博士がブームになっています。著者の所属する高知大学の寄附講座は、高知県からの寄附により開設されたこともあり、発達障害に関する啓発活動の一環で感覚に優しいセンサリーフレンドリーな取り組みの普及・啓発にかかわっています。また、当事者向けのセンサリーフレンドリーな施設マップや利用ガイドの作成で、高知県立牧野植物園ともコラボしています。牧野植物園の職員の皆様は、毎日がゴールデンウィークのように国内外からの多くの利用者で多忙ななか、発達障害の方々にも牧野植物園をスムーズに利用していただけるよう、当事者の方々とも相談しながら熱心に協力してくださっています。

牧野富太郎先生の生きた時代は、森田療法を開発された高知県出身の森田正馬先生が生きた時代とオーバーラップしており、「らんまん」でも少し扱われている自由民権運動も盛んで、日本が近代化していく時代です。著者は根っからの理系人間で歴史について詳しくありませんが、江戸時代のように親と同じ職業につき、藩をまたぐ移動や転居も制限されていた時代とは異なり、自由が広がり、選択肢が広がり、多様化が進むと、変化も大きくなり先の見通しが立てにくくなるので、人々の不安や悩みの種類も変わってしまうでしょう。変化の少ない時代には適応でき、単に風変わりな性格と思われていた特徴も、生活環境の大きな変化に適応できなくなると、メンタルヘルスにも影響し、何らかの支援や配慮、場合によっては治療が必要になるのかもしれませんが、発達障害支援において、併存する精神疾患への対応は非常に重要で、社会啓発も重要です。森田療法が開発された時代は、第一次世界大戦やスペインインフルエンザのパンデミックなどもあったので、社会的に不安が高まりやすく、新たな精神医学的治療法の開発ニーズが高い時代

だったでしょう。自閉スペクトラム症の最初期の症例報告がハンス・アスペルガーやレオ・カナーによりなされたのは、森田正馬先生が亡くなられた数年後の1940年代前半、第二次世界大戦の真っ只中でした。そのため、森田療法の原法のなかには発達障害概念は含まれていませんが、森田神経質には発達障害特性と共通する特性があることは、よく指摘されています。

今年の5月に新型コロナウイルス感染症が5類感染症に移行するなか、ChatGPTなど次々と新たなIT技術が導入され社会や生活が大きく変わろうとしており、その変化についていけない人も出てきて新たなメンタルヘルス上の課題が発生するかもしれません。先の見通しが立てにくく不安を感じやすい患者の支援のためには、周囲の支援者が、患者のニーズを確認しながら先の見通しを立てて段階を踏んでスモールステップで対応していくことになりますが、そのような悠長なことではすまされないほど、社会の変化は急速かもしれません。2024年は森田正馬先生の生誕150周年で、高知県でも12月6～8日に日本森田療法学会の開催が予定されるなど、さまざまなイベントが計画されています。多くの先生方に高知におこしいただき、これからの精神科医療のあり方などディスカッションできると幸いです。

本号では、統合失調症についての論考が多くあります。統合失調症の軽症化や減少がいわれる時代ですが、統合失調症は疾患異種性が大きく、患者のニーズも多様です。ライフステージを通してさまざまな課題に対処する必要があります。支援は多岐にわたります。本号が、これまでの統合失調症診療を振り返り、これからのあり方が検討されるのに役に立ち、精神医学のさまざまな領域が今後の統合失調症支援に対してコラボしていくことを期待しております。

高橋秀俊